

■脅さればふばふ のち媚薬絶頂姦

山の奥、岩と木々しか目に映らぬ獣道。

獣のみならず魔物も現れるため危険な場され、人は滅多に立ち寄らぬが……もし踏み入ったとなれば、自然広がる光景に心安らぐ者も居るだろう。

そんな人の手から離れた空間に、珍しく客が来ていた。

数人の逃げる者。その倍はいる、追う者たち。

彼らは逃亡生活を続ける勇者一行と、その身を狙う山賊たちであった。

【逃げんなよ『悪魔の子』おっ！】【大人しく掴まれやオラッ！】

酷く乱暴な言葉遣い 傍から見れば人攫いか何かだが……世間では、彼らが正義ということになっている。

逃げる者のリーダーは、確かに勇者だ。この世を救うため魔王を倒すべく生まれた存在。しかし、魔王は時の権力者を乗っ取り、彼を悪魔の子……邪悪の権化と偽った情報を広めた。

そんな無実の罪を着せられて以降、都から逃げては身を隠し、悪魔の子だと知られては理不尽に追い回され逃亡する生活を続けていた。

そして悪魔の子を狙うのは正規の兵士だけではない。盗賊やヤクザまがいの者たちも、国王からの褒美を目当てに彼の身柄を追っていた。今回執拗に折って来ている山賊もその一つというわけだ。

しばらく逃げていればその内に撒けるだろうと思っていたが……連日の疲労や見知らぬ場で地の利が相手にあるということもあり、未だに追われ続けていた。

「……埒が明かないわね。みんなは先に行って！ 私が追い払ってくる……！」

終わりのない鬼ごっこに業を煮やしたのは、勇者一行の一人、マルティナ。女的身でありながら闘士として人間離れした実力を持っており、山賊を相手取るには一人でも充分すぎる戦力。逃げられないなら撃退するしかないという踏み、単身で集団を前に立ち止まる。

【おおっ？！ おいおい、ホントに悪魔の子だな！ 女一人置いて自分たちだけ逃げるとはよ】

【まさかと思うが、女一人で俺らを退治しようってか？ ……てか、よく見りゃ相当な上物じゃねえか！】

挑発なのか勘違いなのか、好き勝手言う山賊たち。だが後半……女闘士マルティナへの賛辞は間違っていないが。

マルティナも身分こそ隠しているが、出自は王家……つまりは王女である。選ばれた血統は闘士として育ったマルティナにも高貴さと美貌を与え、肌はきめ細かく、引き締まった筋肉の上には大人の手にも余りある胸乳といかにも柔らかそうな脂が乗っており、否応にも雄の眼を惹きつけるプロポーションを誇っている。

そんな極上の美女を目の前にして下卑た思考を巡らせる山賊たちだが……たとえ悪党でなくとも、人気のない場で彼女を前にすれば少なからず煩惱が働いていたことだろう。

そんな男としての眼に晒されることに嫌悪感こそあるが、それでも相手すると決めたマルティナ。もちろん勝つ自信があるからだ。マルティナをジロジロと見て値踏みし、厭らしい顔で近付く先頭の男……彼が今にも襲いかかるその直前に、自慢の豪脚が炸裂していた。

【げアッ！】

【な、なんだ？ 何しやがった？】

【いいから先にやっちまえ！】

マルティナが放ったのは、何の変哲もない回り蹴り。だがその速度は常軌を逸しており……陽も暮れて視界が悪い中、ただでさえ素早い蹴りを眼で追えない様子だ。予想外の強さに狼狽する山賊たち。頭領とおぼしき者の指示で次々と襲いかかってくるが……ただでさえ実力が離れている上、恐怖しながらの戦闘では敵うはずもなか

った。一人一撃、次々と倒されていく。あまりの強さに頭を無視して逃げていく者さえいるほどだ。

「はあっ！」

【がッ……】

【や、やっぱり悪魔の手先だ……敵いっこねえ！】

【おい、てめえら！】

残るは頭一人。しかし指示しておきながら自らは戦わず……勝ち目はないと見るや、マルティナの美貌と悪魔の子が手に入らない悔しさで一瞥した直後、手下を追い越す勢いで逃避を図るのだった。

「……ふうっ」

戦闘を終えたこと、逃亡生活中の厄介を払ったことに溜息を吐き、マルティナは踵を返し勇者たちの元に駆けていく……。



次なる町へ辿り着いた勇者とマルティナたち。この町の周辺にも魔物が蔓延り、すぐに退治しなければならぬのだが……魔物の侵攻と増殖が激しく、近隣も被害に遭っているようだ。そこでパーティは一旦各地に散り、それぞれが魔物を討伐していくことになった。戦力は分散されるが……人々の危機を放ってはおけない。各地に現れた魔物の相性から向かう者を決め……マルティナは周辺の魔物との相性から、この町に留まることになった。更にこの町を集合場所とするため、一行の拠点となる場の用意を任された。

「わかったわ。みんながいつでも戻れるようにしておくわね」

このような事態は過去にも勇者との旅にも経験がある。今のマルティナの実力なら魔物に負けることはなく、持っているアイテムを売れば拠点作りも容易だろう。また、仲間たちもそう遠くには向かわない。遅くとも三日あれば全員が戻ってくる予定だ。それぞれの予定を決め、町の入口から発っていく仲間と勇者を見送る。

(……さて。早速、魔物を退治して……それから資金調達といきましょか)

——特に苦もないはずの役目。しかし、早くも問題が発生する。

「えっ……これだけしか買い取ってもらえないの？」

倒した魔物たちから奪ったアイテム。それらは一部しか売却できなかったのだ。魔物の攻撃は町の経済にもダメージを与えており、宝石など高級な品は買い取りできるほど余裕がないとのこと。

こういった事情により資金が足りず、拠点の用意が困難になってしまった。

(まずいわね……酒場あたりで仕事でも見つけないと……)

酒場では戦士向けの依頼を受けていることもある。手っ取り早く稼げるものはないか尋ねるが……ここでも魔物の影響があり、そう都合良くはいかなかった。

【すまないね。店を開くだけでもキツくてねえ】

「いいの、ありがとう。もし、いい話があったら聞かせてね」

【……この町はもう、裏通りの店くらいしか……】

「え？」

【ああ、いや、なんでもないんだ。じゃ、がんばってねえ】

(裏通りの……ね……)

つい口を滑らせた酒場店主の言葉。そこから、マルティナはある思考に至る。

裏通り……つまり夜の店。酒場などと違い公の目も届きにくい店であれば、この町でも金は回っているかもしれない。というよりは、そこぐらしか経済が無事な領域がないのだろう。つまり、余所者がこの町で稼ぐには、そういった場を使うのが最も簡単だということだ。

(いや……でも、それは最後の手段よね。他に何か……)

考えながら歩き……教会前に来たところで、小さな喧騒によって思考を遮られる。

「ちょっ……離してください！ 子供の前ですよ！」

【んだよ、そのガキ共のために寄付してやろうってんだ。少しくらいよお……？】

(あれは……)

ガラの悪い複数の男たちが、教会のシスターに絡んでいるようだ。

経済的に困っている教会に寄付を提案し、別の場所で話をつけたがっているようだが……あれでは性質の悪いナンパ……というよりは痴漢である。強引に近付き、多数で囲んで恐怖で逃げられない状況を作ってはシスターの身体に触れている。

男たちの態度からして、とても善意の行動ではない。金銭的に困っていることに目を付け、援助と引き換えにシスターを自分のものにでもしようというのだろう。そもそも、この男たちにそんな経済的余裕があるのかさえ疑問だが。

魔物によって危機が迫っているというのに、こういった手合いはなかなか絶えないものだ。

当然見過ごせるはずもなく、考える前に止めに入る。

「何してるのあなたたち！」

【お、何だシスターさん、こんな美人の知り合い……ってお前は？！】

【頭！ この女、前に山ん中で会ったヤツっすよ！】

「？ ……あっ！」

倒した小物の顔などいちいち覚えていないが、男の一人に言われてマルティナも思い出す。服装が少し違うが……彼らは先日、逃亡中に襲ってきた山賊たちだ。マルティナが撃退した後、この町に逃げ込んでいたのだろう。

偶然にも再会することになり、戦力差を知っている山賊たちは反射的にたじろぎ、シスターから手を離して退いていく。

対し、マルティナはあくどいことを続けている彼らに対し怒りを燃やす。拳の骨を響かせ、じりじりと詰め寄る。

「ちょうどいいわ。私も少しお金に困ってるのよ。……あなたたちを捕まえて、謝礼でも頂こうかしら」

【ひっ……】

追ってくるだけでなく阿漕なことにも手を出す純粋な悪党なら、懲らしめてやるに限る。あの時は急いでいたが、今は見逃す理由もない。

得意の蹴りで仕留めてやろう……そう思っていたが、意外なことにシスターに止められる。

「あの……ありがとうございます。でも、もういいですから！ 女神像の前です、どうかこの方々にも許しを……」

「……………」

教会に勤める者の信条としてか、たとえ身を守るためとはいえ実力行使には強い嫌悪があったようだ。

また、今は『悪魔の子』とされる勇者の仲間。問題を大きくするのはあまり好ましくないことも思い出す。

「……もうこんなことしないと約束して、とっとと消えなさい」

【……糞っ！】

ろくな捨て台詞も吐けず一目散に逃避する山賊たち。またいつ彼らが厄介ごとを起こさないかと考えてしまうものの、ひとまずシスターの無事を守れて一息つくマルティナ。

「大丈夫？」

「ええ、すみません。彼ら、寄付金が欲しかったらと、むりやり外に連れて行こうとして……」

「そう、大変なのね。……これ、少ないけど」

事情を知っては放っておけない。活動に支障が出ない程度の僅か額ではあるが、マルティナは少ない路銀から寄付金を渡す。

「え？ いいんですか？ 助けていただいたうえに、そこまで……」

「いいの、ほんとに少しだけだし」

マルティナも経済的に余裕があるわけではないが……ここで何もせずして、勇者の仲間は務まらない。そう思い、教会に寄付を終えると、再び金策を巡らせる……。



【あああ……何なんだよあの女あ】

町を出てすぐ、森の中——女闘士に追い払われる形となった山賊たち。事が上手く運ばなかった苛立ちを酒にぶつけていた。

特に頭領の怒りは強く、空き瓶を作っては木々に向けて投げつけていた。

——今まで、気に入った女を見ればあらゆる手を使って屈服させ、攫い、犯し、利用してきた。

前回も今回もそうなるはずだった。だが、よりによってたった一人、しかも女……道具として扱うべき対象に止められるなど夢にも思わなかったために、その屈辱は大きい。

しかも同じ相手に二度も妨害され、一矢報いてすらいない。

過去にない悔しさに感情を整理できず、何度も記憶をたどっては仮想を繰り返す。

【せめてあん時、人質とってりやあなあ……】

女闘士の鋭い闘気。あれにはつい怯えさせられた。頭領も腕っぷしには自信があるのだが、あれほどの気迫は魔物にもなかなか見られない。不意に向けられれば、よほどの達人でない限り本能的に後退させられてしまうだろう。

見せられた異様な強さにも苛立つが、更に女闘士は神経を逆撫でする行為をしていた。逃走の途中、振り返って見れば……女は助けた教会に寄付までしていたようだ。ああも善人ぶりを見せられると、余計に腹が煮えてくる。

【まー、都合の悪いことは忘れましょうや】【そーそー、俺らには、コレがあるんだし】手下たちは酒で気分を良くし、気持ちを切り替えている。それぞれが小さなオーブを手にとり、覗き込む。するとその顔がたちまち邪な笑みに染まり、見ているものを肴にまた一杯飲み干す。酒が回り本能的になったというものもあるが……何より彼らは、見ているものの影響で股間を張り詰めさせていた。

下卑た笑いを浮かべる手下たち。だが頭領は彼らと同じ行為では満足できないと思い、いくつか荷物を背負うや舌打ちと共に立ち上がる。

【頭、どこ行くんで？】

【ああ？ 決まってるだろ、『買い』に行くんだよ】

返ってきた怒りの表情に一瞬静寂が訪れるも、男たちはすぐに厭らしい笑いに戻る。

【いいっスねえ！ いいもん『買』ってくださいよお～？】【したら俺らがすぐ『売り』に行きますから～♪】

【へっ、調子いいこと言いやがって。面倒なことは俺任せかよ】

【じゃあ俺らにも『買い』に行かせてくださいよお】

【バカ言え、これは俺んだ！】

荷物に手を伸ばす手下を、笑いながら突き返す。手下が欲しがっているのは、『買い』時に使う道具だ。それは頭領、ひいてはこの山賊にとって重要な商売道具であり、面倒だと愚痴を零しながらもそれを使うのが頭領の愉しみでもあった。

【でも今日はやめといた方が……またあの女と会ったら厄介っスよ】

【心配ねえよ。裏道しか使わねえし……まさかあの女が裏通りの店に寄るわけねえしな】

【まあ……それもそうさかね】

【あーあ、頭のストレス解消に人生終わっちゃう娘がカワイソ～～♪】

【ま、『売れる』ほどの上玉が居ればの話だがな……】

——『買い』、『売り』。二つの淫語を使う山賊たちは、これから起こるかもしれない自分たちの外道な稼業による儲け、そして売買対象となる『商品』への妄想を肴に、また酒を注ぎ足すのだった……。



——町で情報収集に励むマルティナ。今後の旅に役立ちそうな情報はいくつか聞けたが……肝心である今 必要な資金問題は、まだ解決していなかった。

残る方法といえば……やはり、夜の店での仕事くらいしかなかった。

(……他に手がない、というのは……わかってはいるけど……)

闘士として鍛錬を積んだといえど、マルティナも女。まだそういったことは経験がなく、そういった店に勤めるのは強い抵抗があった。無論、働くにしても“最後”までする店に寄るつもりはないが。

(少しだけ、我慢すれば……)

そもそも自分の身が穢れたとして、誰が損をするというのか。人々の幸せに、マルティナの身の清濁など問題ではない。

覚悟を決め、水商売の店……その中でも出来るだけサービスの軽いものを選び、話を持ちかける。

——結果、最初の店……胸だけでサービスする、通称『ばふばふ小屋』にて即採用。順調すぎて逆に不安になるほど話がうまく進んでいった。何でも最近是不景気で客も少なく、繁盛しているように見えてこういった店も経済難なのだから。しかしマルティナほどの美女が来るなら盛り返すかも……と、逆に頼られたのだ。

今まで様々な男にナンパされたり容姿を褒められたことはあったが、やはりマルティナの外見は男の欲望を満たすのに申し分ないようだ。過剰に褒められ、少し自分の美貌を疎ましく思いながらも採用されたことに安堵する。

(あとは、やる、だけね……。大丈夫よ、その……胸で、する、だけなんですもの。前金までもらっちゃったし、それぐらいは耐えなきゃ……)

早速、今日の夕方……もう少しで初勤務が始まる。契約料と称した金——それもなかなかの額——まで貰い、もう断るに断れない状況になってしまった。だがパーティのみんなが帰る場所を作るためにも、ここは腹をくくるしかない。

(……冗談で覚えたお色気スキル、通用するかしら……)

いよいよ時間が迫り、念入れに身なりを整えた後、個室にて待つ。用意されたベッドは皮肉にもリラックスしやすい高質なもの。それを眺めながら数分後……約束していた客が入る。

「こ、こんばんは～……って！ あなた、あの時の……」

【ッ？！ テメェ、何でここに……】

目が合い、まず挨拶。水商売は接客業、嘘でもいいので笑顔を作り、愛嬌を見せる……はずだったが、すぐ愛想は掻き消える。

というのも、その客が昼間に追い払った山賊の一人……頭領らしき人物その人だったからだ。

相手もまさかマルティナがここで働いているとは思っていなかったようで、こういった場に慣れていそうなのに見開いて驚愕している。

(……流石に、こいつ相手はないわよね……)

「悪いけど、帰ってもらえる？ お金はいらないから、とっととここから」

【おい、ちょっと待てよ。客を追い払おうってのかあ？】

今は店員と客……とはいえ、堂々とあくどい行為ができる人物を相手にはできない。

店の者にも事情を話せば理解してもらえるだろう。はっきり断ろうとするマルティナだが、意外にも相手は引き下がらない。

「何よ。あなただって私が相手なんて嫌でしょう？」

【いや逆だなあ……どうせならお前みてえな女がいいと思って来たんだからよ】

(ふてぶてしいわね……)

自分を二度も追い払った相手に欲情する男の性欲。それにうんざりする中、更に男が続ける。

【あー……たしかマルティナだったな？ まさかこんな所で働いてるとはよ。寄付なんかしてっから余裕あんのかと思ったが、お前もカネに困ってんのか？ それとも……こういう仕事が好き】

「黙っててくれる？」

好き勝手言われる前に遮るが、弱味を見せまいとするマルティナの態度を見て男は薄ら笑いを浮かべる。

【凶星かよ。カネに困ってんなら追い返す手はねえだろう】

「……男なんて、他にいくらでも」

【その不景気だ、そう都合のいい男、そうそういねえよ】

男の言う通り、店主によると魔物の影響で客足は減っている。こんな男でも貴重な客の一人なのだろうが……やはりこんな男とだけは、これ以上関わりたくない。

そんなマルティナの気を惹こうと、男が道具袋の一つを出す。ずっしりと重たい袋の中は、金貨と銀貨がぎっしりと詰まっていた。

【ほらよ。これで文句ねえだろ？】

「ちょっと、こんなお金どうやって手に入れたのよ？」

【どうだっていいだろ。お前こそこんな仕事やってて言える口か？】

差し出された金は、この店で十人を相手にしても稼げないほどの額だ。この男一人を相手にするだけでこの額が頂けるというなら、確かにこの上なく効率がいい。またこの男を追い払ったところで、言う通り不景気の中では予想ほど稼げない可能性もある。

「でも変ね。私一人にそこまで出すの？」

【お前こそ自分の価値がわかってねえんじゃないか？ その辺の村娘とはモノがちげえからな……わかってる男ならこれくらいは出すぜ】

(そういうものなのかしら？ こういった世界の相場なんて知らないし……)

信用したくはないが……実際、店主からは二つ返事で雇ってもらえた。マルティナの容姿の場合、今より高級でもおかしくないのかもしれない。

それにしても男の出した追加金は高額すぎる気がするが……

(確実に稼ぐには……これしかない、か……)

「……わかったわ。ただし、これっきりよ」

【へっ、そうこなくちやなあ！】

すぐにある程度の額を手に入れるためには、やむを得ない。渋々に了承すると、男は素直に喜んで髭面を歪ませる。

持っていた荷物を店が用意したオプションの近くに置くと、袋の中から何やら取り出す。安物だろうが、山賊

には不釣り合いなオーブ……いや、鏡だろうか？ 輝く物体もオプションが置かれた棚に乗せ、上着を脱いでいく。

「それはオーブ……？ 何でそんなものを」

【高値だからな、肌身離さず持ってんだよ悪いか】

「それはいいけど、大事なものならしまっておいた方がいいんじゃないの？」

【……これ見せると機嫌よくする女がいるんだよ。鏡代わりにもなるしな】

「へえ……」

胡散臭いが、彼なりに女性への配慮をしているということか。半裸になり、実際に鏡として使用しているのかオーブの方を向いて顔を軽く整えている。

【んだよ、お前も女ならもうちっと反応しろよ】

「この状況じゃあね……」

王家の生まれであり、また様々なダンジョンで宝を見つけたこともあり、宝石の類を見ても驚きはしない。無論、感動しないわけではないが、このシチュエーションで心を動かされるかということと中々難しい話だ。

「さっさと始めましょう」

【愛想がねえなあ…… 一応は客だぜ？ それなりの挨拶ってもんがあるだろ】

金を積んで無理にでもサービスを受けたいと頼んでいる立場でありながら凶々しい。だが確かにマルティナも、受け入れておきながら無愛想すぎたか。言う通りにするのは癪だが……営業スマイルを作り、両手を揃えて会釈と共に一応の挨拶をする。

「では、お客様、今日はよろしくお願いします」

【……まあいい。んじゃ早速……】

やはり悪感情が消せず他人行儀になってしまったが、男は妥協できたようだ。マルティナの挨拶に納得すると、男は近付いて左隣に来ると、いきなり胸に手を伸ばしてくる。

「ちょっ……いきなりなの？」

【そういうもんだろ。……ガチでこの仕事は初めてなんだな】

店主からは、『触れられるのが嫌なら自分がトークなどでリードし、自分から責めるように触っていくといい』とアドバイスを受けており、頭の中で色々とシミュレーションをしていた。

だが山賊、それもここまで強引な男が来るとは予想だにしていなかったため想定通りにいかない。前戯のみとはいえ初めての性交でいきなり恥部に触れてくるのも慣れるはずはなく、男に先導されることになる。

【安心しろ、たっぷり教えてやるからよ……】

節くれ立った男の手が近付き、胸に触れる。服越しとはいえ、男の手に触れられるのはこれが初めてだ。特にこんな物騒な男のことだ、さぞ乱暴な手付きで痛くされると思っていたが……意外にも、その手付きは優しい。

「っ……」

【おお、でけえ……ついにこのデカ乳に触ってやったぜ】

ニタニタとした厭らしい笑いとは裏腹に、男の指が与える刺激はほんの僅か。服のみを触っているのかと思えるほど軽いタッチで、少なくとも肉体的には不快感はない。

【やっぱ本物だったか。最近は服とかで盛ってるヤツもいるから少し怪しんでたが……このサイズで本物とは恐れ入るぜ】

「……それはどうも」

やはり男というものはこの胸囲に眼が行くのだろう。大きく形が整っていることから偽物の疑いまでかけられていたが、男は鎖骨からゆっくりと撫で、側面にも触れ、下から軽く持ち上げ……補正も騙しもない純正品だと知るや大層に感動している。

褒められるのはいいが、それが理由でこの男に気に入られたかと思うと複雑だ。そんなマルティナの心境を知らず、男が賞賛しながら下世話な話を続ける。

【しかしすげえサイズだな……これじゃ一緒に旅してる男共も大変だろ？ まさかもうあいつらと……】

「ちょっと……そんなワケないでしょ！ そういうのはマナー違反よ」

【へっ、そう怒んなって】

仲間のことで下品な妄想をされ、これは見逃せず睨んで窘める。実のところ、仲間の男たちは真面目であり、また旅の忙しさもあってそんな事態には一度も至っていない。

それが今や、気に入らない男に触れられるのを許している——自分の境遇に、自虐的な感情を抱きそうになってしまう。

「次、そういう話をしたら……」

【悪かったって。まあ仲間とはともかく、町の男共はさぞ見惚れるだろうよ！ こんなデカ乳ぶらさげた美人、流石の俺でも初めて見たからな】

「……そう。本当、男って胸が好きなのね」

【そらそうよ！ だがデカけりゃいいってもんじゃねえぜ？】

マルティナに自覚させるためか、男は胸を掬い上げるように胴と密着した面……胸の裏側と言うべき部分を持ち上げ、頂点に向けてゆっくりなぞる。くすぐるような柔らかい刺激に、性感というほどではないがゾクゾクとしたこゆばゆさを感じさせられる。

【形も大事だし、当然カオも首から下もな。胸だけ見てるわけじゃねえよ】

「結局、見た目じゃない……」

【そら男だからしょうがねえわな！】

皮肉も受け入れて豪快に笑う。その動きが、乳首に触れる男の指先にも伝播し、微妙な振動を送ってくる。

【だが、その『全部』がここまで極上の女は初めてだ。大枚はたいてでも触れてみてえと思ってるのは俺だけじ

やねえはずだぜ！】

言われ、やはりそうなのかと想像してしまう。よくよく好奇の目で見られた胸部。自分の美の一つとして、誇らしくもあるが……すれ違う男の多くが、この男のように触れてみたいと強く願うのだろうか。

【想像してみろよ、今まで会ってきた男が……いやすれ違った男も、遠くから見てるだけの男もだ。全員がこのデカ乳を無茶苦茶にしてえって思ってたんだ】

「……やめてよ……」

【ほとんど事実だろ？ 実際今まで触ったのは何人だ？ 一人くらいセクハラしてきたやついるだろ】

「いないわよ、そんな……」

【嘘つけよ……まあいい、マジなら俺が初めてこの爆乳に触った男ってことだからな！】

誇らしく笑い、しかしやはり手付きは優しく、淡い刺激を送り続けてくる。指先が乳首から離れ、周囲……乳輪辺りをくすぐっていく。

【じゃあ他の男たちは目で犯すしかねえってわけだ。このデカ乳をじっくり凝視して覚えてよお、どんな感触か想像しながらシコってたんだろぜ！】

「下品、ね……」

自分の感触を妄想して自慰に耽る。仮想ではあるが、現実として十二分に有り得る話を聞かされ、嫌でも今まで視姦されてきたことを実感させられる。

（……本当にそういう人、いたのかしら……。それは、一人……いえ、何人かは、いたかもしれない、けど……）

美女を目の当たりにした男が、触れることはできずとも妄想で眠れなくなる、という話はよくあるが……実のところ、今までどれほどの男がマルティナを自慰の材料に使ったのだろう。

十人か、はたまた百人か。武闘会などに出た時は、大勢の男たちがマルティナを見て歓声を上げていた。もしかすれば、あの全員がマルティナとの行為を妄想したのだろうか。

男の手が胸全体を撫でさすることで、マルティナも想像してしまう。何百人もの手が胸の右にも左にも手を伸ばし、上を、横を、下側も、乳首も……見事に盛り上がった全てに触れてくる。多くの男に選ばれるという、女としての本能が求める幸福。

図らずも男の愛撫と想像が重なり、抵抗感に残っていながらも性の興奮が芽生えてきた。それでも、少し興奮しただけ。すぐに抑えられる程度だ。身体はほとんど反応していないはずだが……男はその微妙な違いを感じ取ったか、はたまた鎌をかけたのか、乳首に指を引っ掛けてからかってくる。

【お、乳首感じてんのか？ ちいっと硬く……】

「なワケないでしょっ！」

【んだよ、冗談だっつの。少しはリップサービスしろよ】

こんな男に、下品な妄想に、身体が反応するなど認められない。思わず強く否定したが……実の所、乳首には、小さな違和感が生じていた。それが快感の芽ではないと願い……しかしこのままでは不安もあり、自ら奉仕することを提案する、が……

「ねえ、そろそろ私が動くわ。もともとそういう店なんだし……」

【初めてなんだろう、無理すんな。遠慮せず俺に任せときゃいいんだよ。それとも何か？ 娼婦よろしく胸で奉仕してくれるってか？】

「っ……」

【お前だってこの方がラクだろ？ ほら、チカラ抜けよ……】

男に言いくるめられ、反論もできず……その後も延々と、じつくりと胸を愛撫され続ける……

—————

—————

(こいつ……！ ねちっこすぎ……っ！)

あれから小一時間。男は飽きることなく胸の賞賛と愛撫を続けている。絡み付くようなしつこい愛撫、それでいて触れるか触れないかの絶妙なソフトタッチ。それが続き、乳首の違和感は胸全体に広がっていた。

とても性的興奮を自覚できるものではないが……この違和感が男によって与えられる感覚であり、気味が悪いのは確かだ。むず痒さが強くなるほどに、早く終わってほしいという感情も強くなる。

「そろそろ、時間じゃないの……？ 早く終わりに」

【あぁ、店には言ってる。あらかじめ長引いた時用のカネを出してっから心配すんな】

「何でそんなに、お金があるのよ……」

【そいつは企業秘密だな。まぁ俺みてえなテクニシャンだからこそ稼げる秘訣ってのがあんだよ】

話を逸らそうとするが、きっちりと合わせられる。腰が痛いからと立ち上がっても、背中が痒いからと腕を動かしても、そのたびに男も対応して常に胸に触れ続けてくる。胸専門の店とはいえ、ここまで執拗に触れてくるとは思っていなかった。

「……そんなにいつまでも密着されると、ちょっと気味が悪いのだけど……？」

【そういう店だろ？ それにそんなに時間は経ってねえよ】

直球に、あまりにも長時間のタッチに嫌気がさしたと伝える。が、これも適当に返される。

(本当に……！ いつまでも胸ばかり……)

「ひゃっ?!」

と、胸への執着に不快感が溜まりかけた頃。マルティナは普段は出さない素っ頓狂な悲鳴を上げてしまう。男が唐突に耳と背筋に触れたのだ。

胸だけで済ませるという店であり、今までも胸以外は触れてこなかったため警戒が薄れていたマルティナは、唐突な刺激に思わぬ反応をしてしまっていた。

「な、どこを触ってるの?!」

【なんだ、可愛い声も出るじゃねえか】

「そうじゃなくて……！」

【んだよ、それぐらいはサービスだろ。『下』はともかくこれぐれえで怒る女なんざいねえぞ？】

注意したつもりが、逆に男に説教される。むしろ胸奉仕の店だからといって、胸ばかり触っていると娼婦の方が叱ることもあるという。

【硬くなりすぎだっつ】

「……悪かったわね」

【硬いのは俺のココだけで充分、ってな！】

「ちょっ？！ やめ……」

緊張のあまり過剰な反応をしてしまったことに謝ると……男は更に悪ふざけし、なんとマルティナの手を自分の股間に押し当てた。

まだ下着を穿いているとはいえ、いきなり男性器に触れさせられる……しかも触れた瞬間に伝わる、熱い屹立……男が自慢げにするだけはある、鉄のような硬さを持つ肉の弾力。それらの衝撃に驚き手を引っ込めるや、今度はその隙にすかさず乳首を爪弾かれる。

【あ、あとココもな！】

「あっ！」

【お？ やっぱ感じて……】

「違うわよ……調子いいこと言わないで」

【へいへい……お前こそ、少しは愛想よくしろよな】

否定し、キツイ言葉をかけてもヘラヘラと受け流される。だが先程の耳と背筋、そして乳首への刺激は、警戒が薄れていたとはいえ、胸に広がる違和感がより強まった感覚を与えてきた。

男の予感合っているのではないか。自分の身体は女として反応しているのか。そう考えると逆に不快感が生じるのだが、乳房に染みついた妙な感覚は消えてくれない。

【じゃ、次のステップに行くぜ……ありがたいナマ乳を拝ませてもらおうか】

男の次なる提案はナマ乳……服を脱ぎ、乳房を露出させることだった。

「……わかったわ。ちょっと待ってちょうだい」

(……お金のためとはいえ、こんな男に見せることになるなんて……)

あわよくば服を脱がない程度のサービスで済ませたかったが、客がまだ満足できていないなら拒めない。マルティナは首元に手をかけ緑色の服を脱ぐ。

まだ下にはインナーを着ているのだが、それでも脱衣の動きに加え、布が当たったことで柔らかな胸乳が揺れる。これで上半身は黒いインナーのみ。薄い布は肌に密着しており、胸の形が浮き出てその存在を強調する。脱衣という行為そのものにも興奮するのか、男がまた溜息を吐く。

【いいねえ……女に脱がせるってのはやっぱ堪んねえな。デカ乳も揺れてっぞ】

「……………」

改めて羞恥で顔を赤らめながら、黒いインナーの裾を持つ。

【ほら、あと一枚だ】

「っ……」

閉眼し黙ったまま、迷いを払って捲り上げる。黒い布が取り除かれ、腰から上が一糸纏わぬ状態となる。引き締まったくびれ、腹筋、そして胸……脱がされるインナーにつられて持ち上がり、**ぶるんっ♥** と大きく弾む爆乳が露わになる。

男は待ち望んだ胸の露出に、釘付けとなって歓声を上げる。

【すげえ……ようやく拝めたぜ……！】

「……じろじろ、見ないで……」

羞恥が強まり、比例して顔が朱に染まる。嫌悪ではなく恥ずかしさで視線を拒んでしまうが、男は無視して視線を浴びせ続ける。

【そいつはムリってもんだ！ こんな極上のナマ乳、見ない方が失礼ってもんだぜ！】

飽きることなく凝視し、隅々まで視線で触れて堪能していく。しかし男が言うのも無理はない。きめ細かい肌はほんのり光って見えるほどで、透き通るような肌のある中心にある乳首もまた汚れのない桃色。服の上からでも見て取れた量感や布の拘束から解放されてもやはり見事に弧を描き、顔ほどの大きさでありながら形を崩さず重力に逆らい続けている。

理想を体現した胸を目の当たりにして、男が遠慮なしに眼で犯し、ついつい手を伸ばしてしまうのは本能的に自然なことと言えた。

「んっ……」

【悪い、ついな。だが文句言うなよ？ こんなもん前にして何もしねえってのは男として有り得ねえからな】

男の指が直に胸肌に触れる。タッチは変わらないが……感触はやはり布越しとは違う。男女の体温差により、与えられる熱感がより強まった。

しかし胸の違和感には変化がない。緊張や羞恥のせい、感触が変わったせい、それともやはり気持ち良くはないのか。

【どうだ、直に触るのは？】

「……温かい、わね」

【それだけか？】

「……ええ」

正直に言い終えたところで、またリップサービスを忘れていたことに気付くが……男はマルティナの反応は予

想通りだったようだ。

【ま、だろうな。いきなり直にっつのは案外燃えねえもんだ。てなわけで、これを使うぜ】

男が取り出したのは、店が用意していたオプションの一つ、ローション。容器を圧迫すると半透明の粘液が垂れ流れ、男がそれを掬い取る。

「それ……やっぱり胸に塗るの？」

【何言っつてやがる、当たり前だろ。このままじゃ触っつても痛いかもしれねえからな】

やはり印象とは逆に一応の気遣い、それに豊富な……少なくともマルティナに比べれば圧倒的な知識がある。店主からも聞かされており、言うことは間違っつてないのだろうが、やはり粘液を肌に塗るという未体験の行為に恐怖が残る。

「じ……自分で塗るから、」

【遠慮すんなっつんだよ】

「ひあっ……！」

腕で胸を隠しっつ、自分で塗ろうとする。が、そこは男が強引に腕を掴み上げ、無防備になっつた胸に粘液を乗せた掌が迫る。

男の所作はここにきて素早くなっつており、勝手にわからず緊張してっつたマルティナは対応できず、男……人間とはまた質の違う熱を持っつた粘液が胸に塗られる。

「い、いきなりはやめなさいよっ！」

咄嗟に一步離れるが、男は無視してローションの香りを確認し、その質を称える。

【どうだ、初のローションの感触は。……お、この店イイもん使っつてんな、香りがちげえぞ】

(? ……そう言えぱ……この匂い……)

言われ、マルティナも粘液の香りを確かめる。勤務開始前、店主の説明の際に一度香りを嗅がせてもらっつていた。確かにそれも良い香りはしたが……その時とは匂いが違っつうように感じられる。今塗られたものは、説明の時の品よりも遥かに匂いが鮮烈だ。

(何これ……スゴく、いい匂い……！ こ、こんな香りだっつたかしら……?)

見本とは違っつう品なのか、男に触れられ続けてマルティナの感覚が変化しっつたのだろうか。香りが興奮を煽り、塗られた部分は違和感がまた強くなり、はっきりと熱を帯びてきた。早くも身体に変化が出っつていることに不自然さを感じさせられる。

「何よこれ……何かおかしいわ。本当にお店なのでしょうね？」

【どうした、ローションで興奮したか？】

「っ……そうじゃない、けど……」

【じっくり愛撫してやったからな、それで反応してんだろ。それか、お前がそのローションと相性がよかったか】

確認するが、すぐにそれらしい答えが返る。

(相性……？ そんなもの、あるの……？)

性具によっては、体質や状態で効果が変わることもあるのだから。確かに今のマルティナは男の愛撫によって、粘液を塗る前から変化があった。同じ商品でも質が違うというのはよくあることだ。

それでも怪しさを感じずにはいられなかったが……

【ほら続けっぞ！】

「あ……！」

強引に迫られた。反応こそすれ、特に劇物らしい過剰な域ではない。早く済ませたい……それらの理由もあり、そのままの状態での続行を受け入れてしまう。

(……早く終わって……！)

だがその願いは空しくも叶わない。着衣時と同じく……寧ろそれ以上に男の指は粘着質に胸に付き纏ってくる。指が触れるたびに粘液が肌に沁み込み、じくじくと刺さるような熱が内側から込み上げてくる。

「……っ、……………う、ん……………っ」

【お……やっとそれらしい声が出たな】

そうやって熱と愛撫に晒される内……心地よさは感じないにも関わらず吐息が漏れだした。愛撫による欲情というよりは、ただ心拍数が上がっているだけだと思うのだが……それまでの驚愕や刺激の拍子に出たものと違い、押し隠すことができず漏れ続ける。

「ん、……ふう……っ。……っ、あ……」

【ちっとは気分出てきたんじゃないか？】

「っ……残念ながら、そうでもないわね……っ！ 疲れて、息が上がってる……だけよ……………っう！」

【へえ、そうかよ】

「んっ……！」

快感だけは否定する。だが男が嗤いながら胸を撫でると、またそれに合わせて小さな喘ぎが出てくる。

(どうしても……息が、漏れてしまう……っ！)

撫でられ、さすられるたび、腹部が疼いて吐息が出てくる。

発情ではなく心拍数が上がっただけ……そう思いたいが、実のところ知識と経験のなさから、その自信は強くない。

(こいつの手付きのせい……？ それとも……やっぱりこの粘液のせいなの……？ これを塗られてから……何か、変、よ……っ)

今やマルティナの胸は粘液が塗りたくられ、ぬらぬらと光り輝いている。視覚的にも妖しく見え、開放的、もしくは背徳的な感情を誘うが……やはり肌を通して伝わる熱感、理性を揺るがす妙な効力を持っているように思えてならない。

香りも絶えず味覚と嗅覚を刺激し、こちらに至っては最初から今に至るまで心地よい。これが何か効果を発揮しているのかと思い、つい手で鼻孔と口元を隠してしまう。

【どうした？ 匂いがキツイか？】

「そうじゃない、けど……説明の時に、使われたのと……！ 香りが……違って……！」

【そりゃ見本と実際に使うのとじゃ質は違えだろ】

「でも……っ！」

【反応しすぎて混乱してんのか？ 初体験ならそんなもんだろ】

変なところで気遣いができる代わりに、こちらの言い分に関しては相変わらず聞く耳を持ってくれない。訴える違和感を無視し、男の指がまたマルティナの唇から音を誘い出す。

「ん……」

(初めてなら、こうなるもの、なの……？ 人によって、感じる場所や行為が違うというのは……聞いたことある、けど……っ！)

男の言い分と僅かな知識上での話が合致することで、自身の変化を納得しそうになる。そんな心の隙を見計らったように、男の指が角度を変え、少しだけ感触を鋭くさせる。

「あ……っ」

じつくりと胸の周囲をなぞり……乳首に来る、と見せて軌道を変え、乳輪の外周をくすぐる。しばらくして乳輪からも離れ、上側を往復。それを更にペースを遅くし、二度、三度と繰り返し……

びんっ！

「んっっ！」

いつまで撫でるのかと思っていた矢先。痛くならない優しい加減で、少しだけ乳首を摘まみ上げられた。すると胸に宿ったものと同じ熱い感覚が乳首の先から奔り抜け、僅かに漏れていた今までと違い、はっきりとした声が出た。

【へへ……】

「……っ」

(何よ……得意気に……！)

今のは男に、愛撫による快楽で声を出させた、と思わせただろうか。マルティナは否定のために心中でのみ反抗する。

実際、刺激……熱感こそあれ、快感らしい感覚ではない。マルティナは痛みや衝撃で出た声が男を勘違いさせる、という知識を思い出し、今の自分もそうなのだと言い聞かせるが、また男の指が焦らすような動きをし……緊張が高まった後、緩んだ瞬間を狙ったように乳首を摘まむ。

「んっ！ ……っ」

声を上げさせたことで、男がまた微笑する。

(……敏感な部分なんだから、声が出るのは当たり前じゃない……！)

無論、敏感というのは性的な意味ではなく痛覚的な意味でだ。刺激、ダメージには弱い部位なのだから、つい反射として声が出るのは生理的反応として仕方がない。快感がないのだから、愛撫に流されたわけでもない。そんな言い訳を何度も頭で続けては、また乳首を摘まれて声を上げる。

「あっ！ ……っ……んっ！ っ、ふ……うっ！ ……ん！ ……う！ っは！ ……っあ！」

【そうそう、痛かったらちゃんと言えよ？ そうじゃねえなら続けるけどなあ】

どんどん乳首を引っ張る間隔が短くなっていく。それに伴って声も奏でられる。

ただ、声もそうだが、乳首の方も刺激に対する反応を示していた。粘液にまぶされた上に何度も触れられたため、充血して色づきがほんのり濃くなっている。それでいて刺激には更に敏感になっていき、マルティナも自覚しない内に……あくまでも『生理的反応』で……硬くなり、存在を主張していく。

「あっ、ん……いっ！ あ、あ、っ！ あ……っ！」

【聞こえてっかあ？ 痛かったら遠慮なく言えよお～？】

愉快そうに念を押して確認してくる。正直なところ……痛くはない。とはいえこの男に触れられること、しかも良いように声を出さされるのは憚られるため、嘘でも痛みを訴えてしまいたい。それはそれで何だか負けたような気がしなくもないが……いっそのこと嘘の痛みを告げてしまおうか。

そう思った時、また指が乳頭に向けて迫ってくる。

(……また……！)

また乳首を弄られる……かと思いきや、指が逸れていく。

(えっ……来ない、の……？)

と、僅かな失意と安堵が混ざった感情を抱いた瞬間。手首のスナップを効かせて指を素早く動かし、離れた指が急接近して桜色の突起を捉える。

びんっ！

「あっ♥」

その時——ほんの少しとはいえ、触れられるのを期待した瞬間——摘まみ上げられた乳端が、今までよりも一層強い熱感……甘い電流とも呼べる感覚の奔流が迸った。

腹部がキュンとしなり、腰が小さく浮き……気付けば、媚びるような声——初めての、快感の声を上げていた。

【……ほお……】

「っっ?!」

男の達成感に満ちた笑みの前で、咄嗟に手で口を押える。今、自分がどうなったのか考え、朱くなった顔が青ざめていく。

(なに、今の？ まさか、私、こんなことで……)

至った事態への強い失望と驚愕、混乱。思考がぐるぐると渦を巻くが……どう言い訳しようと、事実は変わらない。

マルティナは今、乳首を愛撫され、快感を得てしまったのだ。それは本当に小さなものだが、拒んでいてなお植え付けられた、確実な性の悦びだ。それを確かに察したからこそ、男は大きくはしゃがず静かに微笑むのだ。

(違う……違う！ 私は……)

見開いたまま、強く否定する。しかし頭の中で木霊するのは、否定の声ではなく甘い奔流。また乳突起に触れられ、指が圧するたび、今まで感じたことのない高揚……忌み嫌う相手に与えられる、小さくも屈辱的な快感が胸の中を駆け巡る。

「んっ！ あっ……待っ、て……っ！ ん……………っ♥」

【ああ？ 聞こえねえぞ、はっきり言えよ】

もう男の指は余計な動きをしない。乳首で甘い声を出すと知るや摘まんだまま離さず、何度も何度も小さく引っ張る動きを繰り返す。

その度にマルティナの腰が跳ね、肩が震え、胸が震えて唇が戦慄く。

「ふっ♥ う、っ！ あ♥ はっ……く♥ う♥ あ♥ あっ♥」

(気持ち良く、なんてっ！ こんなこと……ただ触れられてるだけで……気持ち良く……なんか……………)

小さな二つの突起を摘ままれるだけで、声を抑えるのも儘ならない。それを見て男がまた一つ笑い、確信を述べる。

【……感じてんだろ？ 今度こそ、なあ】

「違う！ そんなこと」

びんっ！

「あっ♥ ……っ！ 痛い、だけよ……」

【なら言えって言ったはずだぜ？】

感じている証拠とばかりに前言を確認してくる。

「……リップサービス……しろって、あなたが……」

【ほお、いいねえ。ならそのまま続けてくれや。そんでついでにイッチまいな！】

びんっ！　びんっ！

「あぁっ♥」

両乳首をリズムカルに弾かれ、背筋も同調して小さく仰け反る。大きく開いた唇から、一際大きな媚声が出る。

「っ……調子に、乗らない、でっ！　もう……充分、でしょっ！」

(今……声、大きくなった……？　まずいわ……本当に……気持ち良く、なってると言うの……？　でも……この、感じは……っ！)

声を抑えようとするが、反論すればつられて甘い音色が漏れる。抑えようもない、込み上げる感覚。マルティナの乳首は完全に男の愛撫で性の快楽を得ており、もう既に拒めない状態になっていた。

(なんで、こんなに……！　こいつが、しつこくしたから……？)

男の服の上からのしつこくも優しい丹念な愛撫。肌に直接まぶされた粘液。執拗な乳首への刺激。どれが自分をここまで追い詰めたのか、現実逃避混じりに考えてしまう。

(それとも、やっぱり……あのローションが……)

「くはっ♥　あ♥　…………っ♥　うっん♥」

なぜ胸を触らただけで、ここまで感じてしまうのか。理由を考えようにも、桃色の奔流で思考が纏まらない。

「っあ♥　あ♥　あぁっ♥」

(また！　快感が……強く……っ！)

乳首を挟んだまま男の指が震える。震動が連続して乳首に伝わり、そこから胸全体に向けて快感が伝播。小さな悲鳴を上げててもその愛撫が続き、しばらくすると内に広がる媚熱の温度が一段階上昇。

汗腺が開き、じつとりと脂汗が出ると同時に更に粘液が牝肌に溶け込み、それがまた熱感……愛撫への感度を上げる。

【お？　ガチでイキそうか？　いいぜ遠慮すんな、リップサービスなんだろう？　ほらイケよ！】

「調子に、乗らないでと♥　いつ♥　言った、でしょおっ♥　はぁっ♥　あ♥　……～っ♥　こんなもの♥　気持ち良く♥　気持ち良く♥　なんか♥　あはぁっ♥」

言う間にも快楽はまた少しずつ増していき、喘ぎを何度も引き出される。ついには媚びるような牝の声で哭かれ、男が更に指の動きを変える。指先を皮一枚ほど乳輪に食い込ませ、震動をより深い位置へと流し込む。

「～っっ♥　う♥　あぁ……っ♥」

【その様子じゃ どうせイッたことねえんだろ？ いい経験だ伊ッつけや、『演技』でいいからよお】
「余計な……お世話、よ……っ♥ くふうう……っ♥」
(まずい……ダメ！ 何か、来る……！ これ、イクの……？ 本当に、イク……？ イカされて、しまう……っ?!)

マルティナは今まで、イッたことが……絶頂したことがない。だが内からせり上がる感覚は今までにない圧倒的な恍惚感だと予感でき……それが話に聞く絶頂であると確信させられる。
だが同時、それだけは許せないという女としての矜持も湧き上がる。

(こんなヤツ、相手に……！ それだけは……)

快感を教えられることだけは認められない。歯を食い縛り、不慣れな快感に意地で抗う。

「気持ち♥ 良くっ……ないからっ♥ んんんっ……！ は、早くっ………終わrinaさい……っ♥」

【おー、イッたら終わってやるよ。だからイケよ、『演技』でいいつつってんだろ？】

びんっ！ びんっ！

「うふうっ♥ つっあ……♥」

(クるっ♥ もう……キちゃう……っ♥)

【もう限界なんだろ？ おらイケッ！ イケッ！】

びいんっ！

「っっ♥ ……………！！」

最後に一つ、男が乳首を搾乳のように引き上げた。強い刺激は蕩けた感覚を大きく揺るがし、込み上げた絶頂感がすぐそこまで迫り――

「――ツツツ！」

(それだけは、ダメ！ イカない……！ こんなヤツに……感じたり………しない……っっ！)

――しかし、マルティナは達することはなかった。

今まで感じたことのない、強い快感。はっきり感じさせられる性の悦び。だがマルティナは驚異的な精神力で肉体の昂ぶりを制御し、込み上げるものを抑え込んだ。

「……ふうっ……！ は……っ！」

(た……耐え、た……？ そうよ……こんな責めなんか……私は、屈さない……！)

【……へっ、強情な女だ。もう少しで初めてイケたってのによ】

「はあっ……。残念ながら……あなたの腕じゃ、私の身体は満足できないようね」

絶頂を耐えたことで自信がつき、打って変わって余裕の笑みを見せるマルティナ。もうプレイ時間としては充分経過した。胸だけの店ではこれ以上の行為もないはず。あとは丁重にお帰りいただくだけだ。

「ご利用ありがとうございました♪ じゃ、これで……」

【オイちょっと待てよ】

身体にこびり付いた男の手技と粘液。拭き取ろうとタオルに手を伸ばすが、その手を男に掴まれる。

「なによ、もう充分でしょ？」

【イッてもねえ、イカせてもくれねえんじゃ、こっちもこのまま引き下がるわけにはいかねえな】

「じゃあ……どうしろっていうのよ」

マルティナは快感を御しきってイカなかった。それでは満足できないため、今度は男をイカせろ、ということだろうか。

だが胸を触っても満足しない男をどうすればいいか分からない。疑問符を浮かべていると……

【決まってるだろ、こっちだよ！】

言うど、なんと男はマルティナの股間をひっぱたいた。

「きゃっ?! な、何してるの! ちょっと……離しなさいっ!」

下半身に触れることは店の規則で禁じられているはず。流石にこれは許せず手を跳ねのけようとするが、男は衣服越しに手を密着させ続けて離さない。股間への刺激は強くない……男はそう強く押し付けているわけではないのに、それが思いの外うまくあしらえない。

「やめ、なさいって……んっ……!」

(っ? こんな男の腕力、簡単に捻じ伏せられるはずなのに……)

【どうした? お前が本気になりゃあ腕力でも俺に勝てるはずだよなあ?】

「いいから……あっ、指、動かさないで……離してっ……」

【まさか気持ち良くなって身体にチカラが入らねえのか?】

「……っ!」

怒りでなんとか男の手を股間から離すが……口では言い返せない。

本気で格闘をすれば勝てるだろうが……まさか腕のチカラがここまで落ちているとは思わなかった。やはり原因は男の乳首責め……それによって与えられた快楽のせい、なのだろうか。

「そんなんじゃ……」

【下も触ってやりゃあイカせられるぜ?】

「っ!」

否定を遮る男の自信に、また言葉が詰まる。

イカされる……絶頂させられる。かつてないほど火照った身体は、今にも消えそうな程度ではあるが、その願望があった。それもマルティナの頭をよぎったが……それ以上に、男の意図の方が重要だった。

「……これ以上はダメよ。店にも禁止されてるでしょう」

【固えこと言ってんじゃねえよ。お前だって人生初のアクメを味わいたいだろ?】

「都合のいいことを言わないで!」

肉体はともかく、精神はこれ以上の快楽など求めていない。そしてその精神の影響がまた肉体に反映され、胸の火照りが緩やかにだが冷めていく。

いつもの気丈さ、高貴さを取り戻したマルティナは、男を切れ長の眼で睨み付ける。ルールも約束も守らない男に容赦はいらない。闘気を放ち、腰を落として蹴りが放てる構えを取る。

【なんだよ、ヤッていいだけのカネは出してんだろ】

「ここまでする約束はしてないわ。これ以上するなら……!」

【……なら、悪魔の子の手先だとバラしてもいいんだぜえ?】

「っ……!」

しかし、男の一言で闘気が鎮めさせられる。

勇者が悪魔の子だと言いふらされていること、自分がその仲間だということ。それらを知られては、たとえ金に困っていなくともこの町にはいられない。

……この町で仲間を迎える準備はできなくなるだろう。任された役目を思い出し、マルティナは血の気が冷め

ていく。

「だったら……！」

【おっと！】

「っ？！」

その様なことができないよう、今すぐ男を蹴り倒す。そして手下のところまで案内させる。その後一網打尽にすれば全て解決する。そう思い本気で蹴りを放とうとしたが、その前に男に両肩を押さえられて動きを封じられる。

【考えてることは大体わかるぜ。でも今の感じまくって足腰へろへろのお前じゃ、そこまではできねえよ！】

「……………っ！」

男を倒すことはできても、失神させるなりして口を封じなければ店の者に言いふらされる。だが今のマルティナは想像以上に膂力が落ちており、男に一切何もさせず圧倒することが出来なくなっている。

蹴られながらも男が大声で訴えれば。店から町に悪評が広まり……この町にはいられなくなってしまう。この町で準備できないとなると、以降の旅はかなり厳しくなるだろう。

【大人しく言うこと聞いてりゃいいんだよ。欲しいんだろ、カネがよお？】

「……下衆……っ！」

【よく言うぜ、悪魔の手先が】

皮肉で返すと、男はマルティナから手を離す。

【安心しろ、ハメやしねえよ。手でちっと弄ってやるだけだ。……もっとも、ハメてくださいって言わせてやるがな】

「言うわけないでしょう……」

【ま、前戯以上をされたくないなら、先に俺をイカせることだな】

◆

二人の男女が、ベッドに並んで座っている。隣り合う二人の手は互いの身体に触れ、互いに相手を性絶頂に導こうと努めていた。

……男は外道なことをしておきながら、性に関してはフェアでありたいらしい。マルティナも男を責めやすいようにと、また左隣に位置し、腰に手を回して共にベッドに腰掛けさせた。

その後に粘液を手少量垂らし、股間の愛撫を開始。マルティナも同様、手にローションを付けて男の肉棒に擦り付けるように触れ、扱く。

全ては金……仲間の帰る場所を守るためだった。

(それにしても……何なのよ、これは……)

初めて触れる男の性器。一目見たときにもそうだったが……改めて触れ、何度か感触を確かめることで、マルティナはその形状と肉感に驚愕していた。

男の肉棒は片手では握れないほど太く、脈打った屹立は想像以上に硬い。どす黒い色はこれまでの経験を物語っており、指を跳ねのける弾力と反り返りは精力を主張している。

稀に『槍』などと形容される男性器。大袈裟だと思っていたが……確かにこれほどのものなら、肉槍と呼ぶに

相応しいだろう。

本来であれば、こんな悍ましいものに指一本とも触れたくない。だが下手をすればこの肉槍に、秘部を貫かれる……犯される可能性がある。それを考えると、なんとしてでも満足させ、果てさせなければならないのだ。

手で握って上下に擦れば、粘液と空気が混ざって厭らしい音がぢゅぷぢゅぷと鳴る。初めての手淫で快楽を与えられるか不安だが、肉槍は脈打つことで返答をくれる。このまま続ければ、絶頂……射精してくれる、つまり男が満足してくれるのではと思うのだが。

【へへ……どうだ、手マンの味はよ？】

「……別に……っ」

マルティナが男のものを扱くのと同じく、男もマルティナの股間に触れている。

ホットパンツのチャックを下ろし、露わになった黒いショーツ。男は敢えて下の衣服は脱がさず、手をショーツの中に滑り込ませて粘液をすり付けてきた。

最初は直接触れられることへの嫌悪、生暖かい粘液に衣服が濡れることへの気味悪さが強かった。性器といえど案外に快感はなく、男への責めに専念できると思っていた。

だが衣服が湿ってしばらく経ち、匂いも再び充満してくると……湿り気に自然と慣れ、甘い香りが本能をくすぐる。手と股間だけでなく衣服……股間部全体が粘着質な音を立てる。

繊維が湿って身体に密着することで、男に愛撫される部分以外からも妖しい液体が擦り込まれる。

そうやって丹念にじつくりと続けられれば、否応にも効果が出る。軽く叩かれた際に感じた、乳首に与えられたものと同程度の甘い刺激。最初は小さかったが……胸への愛撫で下半身も反応していたのか、まるで媚薬でも塗られたように発熱が増していく。

「んっ……！」

男の巧みな加減のタッチもあり……胸と乳首を触れられた時と同じく、気付けば明確な性感を与えられていた。

未経験の手淫だけでも苦戦しているのに、男の愛撫に耐えながらでは尚更に難しい。先程も耐え切ったことを根拠に、自分が簡単に達するとも思えないが……イカせ合いの勝負とでも言うべき相互愛撫は、早くも先行きが怪しくなっていた。

【どうだ？ こんな風にマンコとクリを弄ったことあるか？】

「ない、わよ……っ！」

【だろうな、ドスケベな見た目の割に真面目すぎるくらい真面目だもんなあ。こっちも俺が開発してやるぜ！】

他の男は触れるどころか見たことすらないマルティナの秘部に初めて触れる。その歓喜を口にし、胸と同じく陰唇や割れ目を、乳首と同じく陰核をくすぐってくる。

「ん……う……っ！」

快感はある。だが、まだ小さい。堪えられる。未知の技術でこれ以上おかしくされる前に、男を満足させなければ……そう思い、マルティナなりに手付きを早くする。細い指がねっとりと肉槍に絡み、より速く扱き立てる。

【お、いいねえ、その調子だ。なかなか慣れてきたじゃねえか。ならお返ししないとな！】

「?! それ……まだ足すの? あ……!」

男は肉脣を昂ぶらせてくれた礼にと更に粘液追加、掬い取った手で直接 陰唇に浴びせてきた。暖かく甘い刺激が沁み込む。それだけならまだよかったが、更なる責めについ声を出される。

男は粘液を追加しただけで終わらず……たつぷりと浴びせた粘液を纏った指を、陰唇の中に入れてきたのだ。マルティナの秘部そのものは濡れていなくとも、粘液が潤滑油の役割を果たすことで指はすんなりと挿入された。よくて第二関節までとはいえ、初めて男に……しかも憎悪の対象である山賊の、無骨な指に膣内の粘膜に触られる。

「やっ……! 中……は……っ!」

確認していなかったが、股間への愛撫が許される以上、膣内への刺激も受け入れなければならない。だが心の準備ができていなかったため抵抗感が強まり、手淫も忘れて太股を閉じ、男の手首を掴む。意外にもすぐに指を抜いてくれたが、擦り付けられるヒリヒリとした熱さは入口あたりに残ったままだ。

【指ぐらいなら挿れてもいいだろう? ま、いきなりだったのは悪かったな】

「……か、構わないわ。確かに、びっくりしたけど……あれぐらい、なんともないから」

軽薄な男に、マルティナもつい強がってみせる。

男の今の行為は、乳首や陰核へのやり方と同じく、忘れた頃に刺激して意識を向けさせるのが狙いなのだろうか。

それとも、この粘液……媚薬じみた効果を持つ液体を擦り付けるのが目的なのか。強気な秘肉は男の侵入を拒むためにぴっちりと締まり、それが逆に液体を奥へと浸透させていく。

このままでは身体が内側から変えられてしまうかもしれない。だが、耐えればいい。そして男を先に果てさせればいい。マルティナは改めて手淫に集中し、指をカリ首に引っ掛け、根本から搾る。男のアドバイスや喘ぎも参考に、しかし鵜呑みにはせず、自分なりに手技を磨いていく。

【いいぜえ、出ちまうようにがんばってくれよ? こっちも負けねえからよお!】

マルティナの必死さを小バカにすると、男は左手を下着の中に滑らせて股間に触れながら、右腕を身体に回す。そして右手……こちらも粘液をたつぷり塗っており、改めて巨大な肉房に液体をまぶしていく。

「あっ!」

(む、胸も……? 同時に責めてくるなんて……)

抱き付くように密着することで、男は股間と胸を同時に愛撫してきた。欲張りな責め方に相反し、やはりどちらも手付きは加減を心得ている。

左右の手は別の生き物のように全く異なる動きをし、左手が陰唇の膨らみを撫でれば右手が乳首の先端を擦り、右手が胸を持ち上げると左手が陰唇をくすぐってくる。

どちらも、まだ快感の灯は小さい。だが単純に責めが二つとなり、与えられる快感も倍化する。強がった矢先、マルティナの手がまた動きを緩めていく。

【当然こういうのもアリなわけだ。気持ち良すぎて耐えられないなら言えよ？ 手加減してやるからよ】
「なんともないって……言っただでしょ……！ あなたこそ、んっ♥ ……先に、イキなさい……っ！」

また強がるが……もう胸、特に乳首は開発されてしまったのか、すぐに先の快感を思い出して感度が上がる。時たま左右の手の動きがシンクロし、陰核と乳首を同時に弄られると……陰核はともかく、摘まみ上げられた乳首からは強い電流が胸の奥へと駆けていく。

(まだ大丈夫だけど……このままじゃ、またイカされそうになってしまう……！ 早く、早くこいつを……！)

今の腕力では男の手を遮ることはできない。マルティナの気性としても、ここは防御ではなく攻めに転じるべきだ。手の動きをまた速め、根本まで握っては擦り、カリ首を持ち上げるように扱う。握力に緩急をつけ、男がやるように先端を指でくすぐり、粘液を鈴口にまぶす。

だがどうやっても、肉槍は逞しく性豪らしい存在感を見せ付けるのみ。どうすればこの雄棒を満足させられるのか……男の手の動きが変わったのも無視し、今度はひたすら激しく扱き続ける。

「ほら、どう？ 気持ち良くなりたいんでしょ？ んっ……我慢してるんじゃ、ないの？ 早く……出しちゃいなさいよ……っ！」

【おう、悪かねえ。そのままずっと扱いてくれや】

冷静な返答。この程度の刺激は意に介さず、ということなのか。そのままという言葉を実に受けず、苛立ちを抑えて見えない正解に向けてまた工夫を凝らす。

(それにしてもこいつ、さっきから……)

雄棒を扱きながら、男の愛撫に奇妙なものを感じるマルティナ。その愛撫はというと、左手の小指から中指で陰唇を揉みながら、人差し指を使いトン、トン……と一定のリズムで陰核を叩く、というものだ。

叩くというよりは触れる、といった方がいいか。とにかく、決まったテンポの刺激を送り続けている。一応、右手もそのテンポに合わせているのか、時折タイミングを合わせて乳首を触れられる。やはり性感帯を刺激され、少々の快感はあるが……それでも奇妙な印象の方が強く、何だかおかしくすら思えてくる。男の方もマルティナが思った以上に感じず、試行錯誤しているのだろうか。

(まあいいわ。今はこっちに集中……)

トン、トン……と変わらないリズムにも慣れてきた。もう小さな快感はあっても翻弄されることはない。そう思い、手淫に注力していたが……

ぴんっ♥
「んっ！」

慣れたはずの定期的な刺激……だがしばらく続くと、それがマルティナの息を詰まらせる。突然に刺激の快感が増したのだ。

まだ決定的な威力ではないが、それまでより一回一回の刺激による快感が大きくなっている。

(? なんで……? さっきと、違……)

男の愛撫の仕方が変わったわけではない。相変わらず淡々と一定の間隔で陰核に触れているだけだ。なぜ快感が増したのか疑問に思い、しかし考えて分かるでもない。無視して肉扱き続けるが……

ぴんっ!

「あっ♥」

(また……快感が、強く……)

快感威力が再び増加。やはり偶然に一度だけ心地よいのではなく、この一定の刺激そのものの効果が増している。

「あ♥ ……んっ♥ あっ♥」

(なんなの、これ……? ただ同じリズムで触ってるだけなのに……気持ち良くなってくる……!)

理屈は分からないが、機械のように同じ刺激が少しずつ効力を上げている。まだ抑えられるが……止むことなく定期的に与えられる愛撫の快感が、これ以上に増すと厄介だ。

身を振って男の手から逃れようとするが、男は巧みにマルティナの動きに合わせ、指を陰核から離さない。

【どうした、気持ち良いか? 声が出てんぞ?】

「違うわよ……んっ♥ この腕が、っ……暑苦しいから、うっ♥ あ♥ ……っ♥」

言い返す間に、また愛撫快感が上昇。喘ぎが止まらなくなり、まともに話すことが難しくなる。

一定リズムの愛撫が効果を発したと見たか、男がニタリと相を歪ませて右手を動かす。乳首を摘まみつつ人差し指が頂点を押さえ、こちらも左手に合わせて一定のリズムで乳首を圧迫し、先端を叩く。

「あっ♥ ふ……っ♥ 暑い、から、んっ♥ 離し、あっ♥ あ……♥」

(クリトリスが、熱くなってきて……ち、乳首も、また……!)

繰り返される刺激に、いつの間にか媚熱を発していた陰核。乳首も同調したように熱くなり、指の動きに合わせて内側に熱が伝播。二つの点を繋ごうとするかのように、快楽の電流が身体の内面に奔り抜ける。

陰核に加えて乳首への刺激も快感が増し、心地よい部分が二倍となる。だが本能の発熱具合は倍以上で、触れられれば触れられるほど胎の底に熱が溜まっていく。

もうこの快感はとても放置することはできない。手淫を止め、男の手首を掴む。このまま無理矢理にでも引き剥がしたいが……もう快感に腕力が侵されたか、まるでチカラが入らない。

そしてまた快感が増す。乳首の刺激も足されたからか、快感の上昇する間隔が短くなっている。心なしか、指の動きも僅かに速まっている。

「なん、で……♥ こんな♥ こんなの♥ っは♥ あ♥ ああっ♥」

思わず疑問が言葉として出る。だが謎が晴れることはなく、また一段階 快感が上がる。

【なんだよ、なに手コキやめてんだよ？ その手はなんだ、どうしたんだ、ええ？】

「あっ♥ あっ♥ うっく♥ はっ♥」

マルティナの抗いを愉しむように、男が逆に問う。気持ち良くなっている、などと素直に言えるはずもない。だが言わずとも男は既にそれを把握している。力尽くでも抗えないほど効いていると見て、愛撫を安定させるために更にマルティナに密着。ほぼ抱きかかえるようにして、陰核と乳首を愛で続ける。

「やめ♥ ああっ♥」

【なんでやめて欲しいんだ？ ちゃんと言ってみろよ】

「それは♥ あっ♥ んっ♥ あっ♥ あっ♥ あっ♥ あっ♥ からっ♥」

【あっ♥？ どこがだよ？ まさかクリと乳首が熱くなってるってんじゃないよなあ？ 言ってみろっ！】

「ちがっ♥ あ♥ やっ♥ ああっ♥ も♥ やめ……っ♥」

直接言葉にせずとも……もはや快楽を御しきれなくなっているのは明らかだった。気丈なはずの女闘士がつい懇願したのを聞き遂げると、男はマルティナの股間と胸を掴んで身体を持ち上げた。

「ひっ♥ な、何をっ？」

持ち上げられて気付いたが、マルティナの身体はふわふわとした浮遊感に包まれていた。筋力も完全に緩んでおり、全く逆らうことができず男に抱えられ……そして、すぐ近くに置いてあるオーブに映るよう角度を調整される。

【見えるか？ 自分の顔が】

「えっ？ ……………あっ……！」

オーブに映る自分の顔。それは今まで鏡で見てきたものとは全く異なる、何ともだらしなく緩んだものだった。間違いなく、男の愛撫に……快楽に歪んだ顔。それを知ったことも喪失感が大きい、なにより見せ付けるといふ悪趣味さに身体が強張る。

「嫌っ……見せないでっ！」

【へへ、イヤじゃねえよ……ちゃんと見ろっ！ 自分の蕩けた顔をよお！】

オーブを置いたのは何とも不自然だったが、目的はこれだったのだ。オーブ表面は鏡のように反射し、見る者の姿を映す。マルティナの痴態をこうしてマルティナ自身に見せ、辱めるための淫具として用いているのだ。

見て取れる、性感に乱れた姿。見せられて嫌悪を抱いたはずだが、もう身体は芯まで蕩けており、精神もその影響を受けている。見られたことが新たな刺激となり、悪趣味なはずの行為で四肢の熱がまた一つ増した。

そして男は抱え込んだまま、愛撫を再開。一定間隔で陰核と乳首を叩くと、そのたびに媚熱が身体全体に奔り、オーブの中のマルティナは宙で腰を小さく跳ねさせる。

「あっ♥ あうっ♥ やめ♥ ひやめっ♥ んああっ♥」

快感に悶え、懇願するしかない女闘士。その様子を見て余裕が出た男が、とうとう秘密を明かしだす。

【へへ……やっとクスリが回ってきたみてえだなあ？】

「っ?! く、薬……? やっぱり、んっ♥ あの液体は……っ♥」

胸と股間に塗られたローション。店の見本とは香りが違うため怪しいと思っていたが、やはり男によってすり替えられていたのだ。

おそらく使われた粘液は媚薬だろう。それも初体験のマルティナがここまで感じるとなると、相当に強力なものと推測できる。

【お、気付いてたか。流石のアンタもこのクスリは効くようだな……つっても、普通のオンナと違ってかなり時間かかったがよ】

「あなた……! 最初から、こうする、つもりで……!」

【相手によっちゃ必要ねえがな。まさかお前が来てるとは思わなかったぜ……えらい蕩けるまで長かったが、使って正解だったなあ!】

マルティナの身体を揺すり、自分の技巧と薬の威力を自慢してくる。もうマルティナが自分のものになったと確信しているのだ。

【これはまずオモテには出ねえブツでな……何しろ効き目が強すぎる。普通ならマンコの中に塗っただけで発狂もんだぜ?】

マルティナが大して経験もないのに、忌むべき相手にここまで反応している理由が明らかになった。

非正規の強い媚薬を使い、豊富な知識と技術も用いて時間をかけてじっくり開発する。ここまでされれば、牝としての本能を炙り出されても仕方がないかもしれない。

だがそれを知って、心が折れることはない。むしろ怒りが燃えてくるが……もう感情で肉体を制御することはできない。男をオーブ越しに睨んだまま、身体は素直に反応してしまう。

「最、低……っ♥ そんな手を♥ 使わないとっ♥ 満足……できっ♥ できない、のね……あぁっ♥」

【蕩けた声で何言ってやがる。ま、それでもこんなに粘ったマンコは初めてだぜ、よく耐えたもんだ……なぁっ!】

快感に染まった声で何を言っても効果はない。男はマルティナの気丈さを称えろと、一気に指の動きを速めた。

「ふっううっ♥ つぁ♥ あ♥ やっ♥ やめ♥ つぁ♥ あくううっ♥」

【もうクスリは回ってんだ、いくらお前でももう耐えらんねえよ。つうわけで遠慮なくイケやっ!】

充分に発熱した陰核と乳首を連打され、身体全体が跳ね続ける。乳首だけを責められた時のように、快感の波が迫るのを感じる。だが今回の波は前回よりも大きい。今この波を被ってしまったと思うと、悍ましさで身が震える。

全身を強張らせ、頭を左右させポニーテールを揺らして快楽を否定する。

「くはあぁっ♥ いっ……イカないっ♥ こんなので♥ イッたりなんてっ♥」

ここまで卑劣な男によって絶頂する訳にはいかない。耐えるマルティナに、男がまた変化を付ける。
陰核を親指で押さえつけると、そのまま二本の指を膣内に入れる。第二関節まで入った人差し指と中指が膣内で曲がり、的確に陰核の裏側を突く。

「あひいっ?!♥♥」

陰核を内と外から潰す動き。今までにない、本当に内側からの刺激はマルティナの牝肉に突き刺さり、痺れる快感に顔が歪む。

既に絶頂相当の快感。更に男が最後に、陰核を挟んだ指を激しく震わせる。

【おらイケッ! イッチまえっ!】

「うっあ♥♥ あ♥♥ あっ♥♥ いやっ♥♥ ああああっ♥♥ つ……………つつ!!」

開発されて熱した牝肉に送り付けられる、凄まじい快樂。あまりの快感に身がのたうち、視界が明滅。
今度こそ絶頂する——そう思われたが、歯を食い縛り、男への嫌悪を奮わせ……本当にギリギリのところで、絶頂を堪えきる。

「ふつつ♥♥ は♥♥ はっ♥♥ は——っ♥♥ はあ——っ♥♥」

【……っ、まだイカねえかよ。しぶといマンコしてやがる!】

(あ……♥ 危なかった……♥ も、もう♥ これ以上は……保たない……♥)

男も今回こそ絶頂させられると思っていたのだろう。指の震動での陰核責めも耐え抜かれ、余裕が一転して感情的になり舌打ちする。

だが絶頂しかけたのは事実。また同じ刺激をされれば、マルティナはそれに耐えられる自信はない。

絶頂していない分、快樂は発散できずに溜まったままだ。深く呼吸をして落ち着かせようとしても熱は一切下がらず、むしろ達した方がよかったのではないかと思えてくるほどだ。

これ以上責められれば、もう達するのは時間の問題。そして更なる責めと言え、もう考えられるのは一つしかない。

【仕方ねえ……こいつで善がらせてやるとするか!】

「っ!!」

抱えていたマルティナをベッドに押し倒し……反り返る巨根をアピールする。

やはり男が次にとろうとする行為は、挿入——本格的な性交そのものだった。

(嫌っ! それだけは、絶対にっ!)

いくら身体は好きにされても、精神だけは屈さない。マルティナは最後の手段として、店主に通じる緊急用のベルを使おうとする。

男には悪魔の子の一味だとバラされるかもしれないが……もうこれ以上辱められることの方が耐えられない。

しかし、そこで男が告げる。

【オイやめとけよ。……悪魔の子の手先から寄付されたとなりや、あの教会にも手が回るかもなあ?】

「……!」

ここで、教会に寄付したことを利用される。あの時、寄付したのを見られていたのも意外だったが……まさか

このような形で脅しの材料にされるとは思わなかった。

もし自分が寄付したことまで騒がれれば、教会が悪魔の子と繋がっていると疑われてしまう。善意の行動がここまで裏目に出るなど、予想できるはずもなかった。

（迂闊だった……！ こんな……こんな、ことになるなんて……！）

【人のこと散々言ってくれたが、テメエの方が悪党なんだよなあ！ 国に迫られる悪魔の手先が！】

何の罪もない、関係ない一般人を犠牲にはできない。しかし、このまま成すが儘では——そう考える間に男が覆い被さり、マルティナの腕を掴んで一切の抵抗を阻む。

【わかったか？ あの教会にまで迷惑かけたくないなら……観念してヤラれろやっ！】

「嫌っ……嫌……ダメえっ♥」

宛がわれた肉根。愛撫でほぐれた秘裂は雄を拒めず……侵入を許してしまう。

絶望の中、雄の欲望そのものである肉塊がマルティナを貫いた。

ずぶんっ！

「っっ！ あ……………っっ！！」

先端が入口を潜り、亀頭までが入る。そこには一応、初の交合に痛みを訴える膜があるはずだが……男が丹念に下拵えを重ねた成果か、痛みは全くなかった。そのまま肉槍の半分ほどが挿れられ、精神と肉体がショックで言葉を失う。

手で握った時にも相当の質量を確認していたが、膣内に挿れられるとその大きさを思い知らされる。

内側からの圧迫感は凄まじく、指で弄られた時の感触など比ではない。あれほど巨大なものを突き刺され、自分の身体がどうなっているのか。愛撫の恍惚感も忘れて不安を抱くが、反して痛みや苦しみはない。

【おおっ！ そうだろうとは思ってたが……やっぱ処女だったか！ 嬉しいねえ、俺が初めての男ってわけだ！】

「あ……ああ……」

大量の粘液と愛液の中に混じる朱色。それが女闘士の身が純潔であったことを告げている。

苦痛はなくとも、処女貫通とあってはさしものマルティナも精神が揺らぐ。この耳に男の皮肉は届かない。だが男は気にせず、むしろ反応を強引に搾り出そうと肉根を根本まで突き入れる。

【いいぜえ……鍛えてるだけはあるぜ、この締まり！ 堪んねえ……って、聞こえてねえか？ ま、俺のを挿れられりゃ最初はそうだろうが……なに、すぐに慣れる。気持ち良くしてやったお陰でなあっ！】

ずんっ！

「ひいっ！」

巨根が更に奥に刺さり、男の下腹部が結合部に当たる。既に圧迫感は相当だというのに、まだ入ってくるという事実もあって悲鳴を上げる。

これから、この肉槍で自身の中をかき回されるのか。不安がより強くなるが……マルティナを宥めるように、そこからは前戯と同じくスローな動きになる。

ずっ……ずぶ……っ！

「ひっ……う……っ」

【挿れたばっかだ、しかも初めてで俺のってなると混乱して頭の整理がつかねえだろうが……こうやってゆっくり動かしてやると……】

「うっ……くぁっ？ あ！ ん……っ！」

マルティナが息を吐くのに合わせ、男が肉槍をゆっくりと引く。すると圧迫が減ったこともあり、下半身の感覚が徐々に回復。

あらかじめほぐされていたからか、男の前言通り膣肉がすぐ順応し……内からの圧力、雄棒の感触に、肉壁の一つ一つが快感を覚えだしていく。

(嘘……嘘よ！ こんなっ！)

ずぶっ……！

「ああ……っ♥」

再び深く突き入れられ、今度はすぐに甘い音色が出た。乳首と陰部、それらへの執拗極まる愛撫が功を奏し、膣肉は既に蕩けていた。あとは肉棒を挿れられる刺激、男の巨根の圧迫に慣れてしまえば、簡単に牝として反応してしまうのだ。

生憎と女の扱いを心得た、緩やかで丁寧な腰使い。それがマルティナの膣肉を牝に変え、雄に犯される悦びに目覚めさせていく。

【おらっ、どうよ？】

「んっ！ あっ♥ ふっ♥ っくう……っ！」

男が具合を問うも、肉の衝撃と快感で息が詰まって答えられない。相手が引いては突き入れるたびにその感覚が与えられるが、一突きごとにその度合いは変化する。肉体が順応していくにつれ、感じる衝撃は次第に小さくなっていく。いや、実際には快感と同化しているのだ。肉衝撃はそのままに、快感は微量ずつだが増加。巨根に犯される混乱が、少しずつ快感に変わっていくのを実感させられる。

「ふぁっ♥ あ！ くっ♥ んんっ♥」

(大きくて、硬いのが……！ 私の中をっ、どんどん……変えていく……！)

鍛えて引き締まったマルティナの肉体。膣道も締まっており、媚熱でほぐれていながら肉棒をキツく締め付ける。そのために巨根の感触が余すことなく伝わってくる。

男の自慢の肉槍。その熱、高いカリ、硬さ、巨大さ。それらが牝肉を発熱させ、抉り、かき回していくのが手に取るように感じてしまう。

男の注挿の狭く閉じる膣壁が徐々に押し広げられ、その形を牝肉に刻まれていく。

「はぁっ♥ あああ……っ！」

(私の、中が……！ こいつのためだけに……変えられる……っ！)

経験のないマルティナでも、男のものが特別に巨大であることは分かる。このサイズのもの慣れてしまえば、

もう他の男に順応することはできないのではないか。いずれ伴侶となる相手を考えると、つい想像上で比較してしまう。

(ダメ！ そんな……そんなことで、想像して、比べるなんて……！)

【そろそろ、ペースを上げるか……】

ヒクつく膣肉からマルティナが順応しつつあるのに気付いたか、男の動きが少し加速。ねちっこく陰湿でありながらも精細に、マルティナの順応ぶりを確認しながら注挿の速度と深さを変えていく。

「はあっ♥ く♥ くうっ♥ くふうっ♥」

(速くなって……だ、ダメ！ 熱いところに……当たると……！)

何度も出し入れするたび、とある箇所……男の陰核責めの際に刺激された、陰核の裏側あたりが特に敏感になっているのに気付く。そこを挟まれ、引っかかれると快感の電流が強くなり、喘ぎがより官能的になってしまうのだ。

男もあざとくそれに気付き、先端とカリで重点的に責める。浅いが小刻みな刺激がマルティナの腰を震わせる。

「あっ♥ うっ♥ んっ♥」

【ここか？ ここが弱えんだろ？】

じゅぶ！ ずぶっ！ ぢゅぶ！ ずぶっ！

「うううっ♥ 弱く、なんかっ♥ ああっ♥」

一点のみを突かれるが、深く挿れられるよりも遥かに快感が強い。男に言われ、そこが弱いと自覚させられればより感覚が鮮烈になり、一ヶ所の熱が全身に広がる。否定しているにも関わらず時折に首を反らしているのを見た男が、更に刺激を大きくしていく。

【そろそろマンコも俺用が変わってきたな。じゃ、そろそろ本格的にやるぜっ！】

「ひっ♥ ああっ♥」

男が再び奥へと肉槍を沈め、そして抜くのかと思えるほど勢いよく引く。弱い部分にカリ首が当たるまで引くと、再び根本まで突貫。大きなストロークが高速で繰り返され、凄まじい圧迫と衝撃を生む——が、弱点を責められ蕩けたマルティナの肉壺は激しい責めを即座に受け入れ、容易く発熱してしまう。

ぱんっ！ ぱんっ！ じゅぶんっ！ ぱんっ！

「ううっ♥ あっ♥ は、激しっ♥」

刺激と快感が共に強烈なものになる。突かれれば身体が揺さぶられ、官能も大きく煽られる。男の陰囊と下腹部がマルティナの下半身に当たり、肉と肉のぶつかる乾いた音……交わいの音が鳴り響く。

【やっぱ最高だなこのデカ乳は！ 突いてやるごとにバカみてえに揺れやがる……堪んねえ！】

巨大な乳房が突き入れの衝撃で大きく揺れる。

たぶんっ♥ と音が聞こえそうな迫力は圧巻であり、男は本能を刺激されて賞賛する。
大きいがゆえに突けば突くほど波打つそれを気に入った男は、爆乳を、マルティナの身体を揺らすためにピストンを激しくしていく。

「やめっ♥ あっ♥ ダメ♥ あはあっ♥」
「ぱあんっ！ ぱんっ！ ぱんっ！ ずばあんっ！」
「んあっ♥ は、激しっ♥ いいっ♥」

責めることで胸を、首を、髪を揺らされ、視覚的に愉しまされる。
完全に男の悦びのための注挿。しかし、感じているのはマルティナの方だ。
深く激しい衝撃に牝の悲鳴を上げ、快感で身を打って快楽に焦がれているのを晒してしまう。

(ダメっ！ こんなやつ……なんとか、しないとっ！ でもっ……)

快感を抑え、否定したい。だが激しいピストンを受け、物理的にも官能的にも抵抗は困難だ。諦念が僅かに浮かぶマルティナを、男が更に追い詰める。

【おらっ、どうだこいつの味は？ そろそろイケよ！】
「ふう——っ♥ ふ——っ♥ いっ♥ イカっないっ♥ イクわけっ♥ あひっ♥」
【なら、これでどうだっ！】
くりいっ！
「あひいっ♥♥」

男が突き上げながら、硬くなった陰核、大きく揺れる乳首を捕らえて摘まみ上げる。たちまち快感が爆発し、快楽の苦悶でマルティナの美貌が淫らに歪む。

【こっちも敏感になったままだろ？ 同時にされるの好きだったよなあ？】
「いやっ♥♥ ああっ♥♥ あああっ♥♥」
(乳首っ！ クリまでっ！ 今、そこはっ♥ 同時はダメえっ♥)

敏感になった部位の同時責めがマルティナを快楽で悶えさせる。乳首、陰核、膣内……三ヶ所が同時に責められることで身体が一気に加熱。二度 凌いだ絶頂の波が、更に大きくなって迫りくる。

【イヤイヤしながら締め付けが強くなってんぞ！ すっかり乳首とクリがお気に入りじゃねえか！ あんなに喘ぎまくってイキかけたんだ、もうお前も堪んねえんだろお？】
「ちがう♥♥ ちっ♥♥ はうんっ♥♥ んんんいいいっ♥♥」
【情けねえ声出して何が違うんだ？ 弄ってやった途端に感じてんのバレバレなんだよ！ それとも何か？ 乳首やクリよりもチンポが気持ち良いってかあ？】

言うや、肉突きの強さも上げてくる。弱点を引っ搔きつつ奥まで突き入れ、牝突起の同時責めで昂ぶった肉壺がうねり、最奥の子宮が悦びに震える。

ずぶんっ！ ずばおおっ！

「はっ♥♥ あああああっ♥♥」

(乳首っ♥ 乳首とクリが♥ 熱いっ♥ クリの裏もっ♥ 擦られるたび♥ 頭っ チカチカしてっ……♥)

いよいよ感覚が牝そのものとなりつつある。取り返しがつかないまで変化させられるのが恐ろしく、涙ながらに訴える。

「もっ♥♥ もういや♥♥ もうダメっ♥♥ 抜いてっ♥♥ 抜いてえっ♥♥」

【正直に言えば抜いてやるよっ！ 俺のチンポが気持ち良いですってなあ！】

「そんなのっ♥♥ 言えるわけっ♥♥ ああっ♥♥」

散々焦らした獲物を今度こそ逃がすまいと、男は容赦なく屈服を要求してくる。身体がどこまで虐め抜かれても、精神でだけは降伏できない。蕩けた舌で否定するが、男はその否定さえ愉しむ。

【心だけは屈さねえってか、いいねえ！ こんだけマンコ濡らしてりゃ世話ねえがな！】

ずんっ！

「あひっ♥♥」

【その強気がどこまで保てるか見届けてやるよ！ ま、とりあえず……】

どれだけ責められても完全には屈さない。その健気さを嘲笑いながら、男がまた粘液を手に取り――

(また♥♥ それ――♥♥)

【身体はいい加減 屈しとけやっ！】

びしやああっ！ ずばおおっ！

「いやあっ♥♥ あああああああああああっ♥♥」

乳首に、陰核に、結合部から弱点と膣奥に。あの媚薬粘液が、今度は大量に浴びせられる。

官能を強制的に蕩けさせる甘い香り、肌がヒリつく熱感がここで激増。既に限界だったところでこの加撃に、耐えられるはずもなく――

(ダメ……♥♥ 今度こそ♥♥ もう………♥♥)

―― 三度目となる巨大な快樂の波に、マルティナは遂に呑まれた。

「いや♥♥ いや♥♥ あっ♥♥ ああっ♥♥ ……………っ♥♥♥♥

ダ……メっ♥♥♥♥ あああああああああああああああっ♥♥♥♥」

内側の圧迫が一気に浮遊感に変換される。熱が全身を包み、視界が激しく明滅。脳天まで迸る電流が意地も矜持も吹飛ばし――マルティナは、思い切り仰け反って大きく啼き叫んだ。

(い……♥♥ イカ、された……♥♥ 私……♥♥ そんな……♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で！